

適者生存

紗愛奈

適応

見上げると、そこには色とりどりに染まった紅葉が見える。

「わぁ・・・、今年もきれいになったな・・・」

そんな独り言を言いながら、私は境内の掃除を進める。

掃除をしているとふと、目に留まった木が一本。

”テルテル坊主”が括り付けられている木。

「さすが、紗夏（さなつ）ちゃん。

境内もきれいに掃除してくれてるねえ・・・」

声のしたほうを向くと、そこには神封（しんふう）神社の神主さんの雅（みやび）さんが賽銭箱の前に立っていた。

「雅さん、こんにちは。」

「こんにちは。」

やっぱり、境内がきれいだと紅葉も映えるねえ。

とてもきれいだよ。」

「ふふっ、そうですね。

今年の紅葉は、例年に比べてかなりきれいに色が染まっていますから。」

そんな会話を交わしつつ、私は掃除を進める。

「そういえば紗夏ちゃん。

面白いものでも見つけたのかい？」

「え？」

何ですか？」

「いや、僕が声をかける前、木の枝を見てたからね。」

「あ、はい。

テルテル坊主が木に括られてて・・・。」

「テルテル坊主か・・・。」

雅さんはそう言うと、徐（おもむろ）に宿舎へ戻り始めた。

「雅さん・・・？」

疑問を訪ねる隙もなく、そそくさと宿舎へ入ってしまった。

「なんだろ……」

しばらくすると、雅さんが手に鋏（はさみ）を持ってテルテル坊主が括られている木の前へ来た。
。

すると、少し背伸びをし、テルテル坊主を吊っている紐を切ろうとした。

「あのっ、雅さん。

流石に切ってしまうのは……。」

「でも、首を括った人形だよ？」

「ですけど……。」

今日は七五三日和ですから、参拝のお客様が付けたのかも……。」

「ああ、そうかも。

……いや、そうだ。

2年前、大雨で七五三が台無しになった女の子がいたからね。

きっと晴れるように願ったんだろう。」

「ああ、なるほど。」

「多分ね。」

・ ・ あ、七五三で思い出した。

玉串（たまぐし）の榊が数本足りないんだ。

3、4本でいいから取ってきてくれる？」

「はい、わかりました。」

私は手にしていた箸を階段に立てかけ、雅さんから鋏を受け取った。

この神社は比較的、参拝のお客様が少ないので玉串も数本で済む。

私は鋏を巫女服の袂に鋏を入れ、榊が生えている鎮守の森へ足を進めた。

鎮守の森へ向かう途中の参道である女性に声をかけられた。

「あの・・・、この神社のお方ですか？」

「え？」

ええ、そうですが。

ご参拝のお客様ですか？」

「ええ、まあそうなんですけど・・・。

実は、娘が何処かに行ってしまったんです。」

「娘さんが・・・？」

「ええ。

・・・あ、もしかしたら神社のほうにもう行ってしまったのかしら・・・。」

「あ、いえ。

恐らく神社のほうにはまだ行ってないかと・・・。」

私がそういえる根拠は1つ。

私は神社のほうから参道へ向かってきたけど、道中誰ともすれ違わなかったから。

「もしよろしければ、娘さん。

お探しでしょうか？」

「え・・・？」

いいんですか？」

「ええ、大丈夫です。」

「ありがとうございます・・・っ。」

娘は桜と言って、年は6つです。

着物を着ています。」

「・・・桜ちゃんですね？」

わかりました。

少々お待ちください。」

私は小走りで鎮守の森へ向かった。

なぜならこの神社に隠られるような場所は限られている。

宿舎の影は神社と併設されているので隠れていないことがわかる。

そう考えると、私は鎮守の森しか浮かばなかった。

まだ残っている落ち葉が踏むたびにガサガサと音を立てる。

私は直感である場所へ向かっていた。

”ある事件”が起きたあの場所へ・・・

”ある事件”

去年のちょうどこの季節。

私が今日のように玉串を取ってきてくれと頼まれ、鎮守の森へ向かった。

森の少し深く、あまり人目につかない場所で事件は起きた。

「かわいいおねーさんだね。」

私が玉串を取っていると、若い4人組の男の一人が話しかけていた。

その男はニット帽をかぶり、革の上着を着てた。

「コスプレ巫女さん？」

超タイプ。

黒髪で色白で。」

ニット帽の男は私を舐めるように見た。

「いいねえ。

ちょっと着いてきてよ。」

私はニット帽の男に二の腕をつかまれ、引っ張られてしまった。

私は近くにある大きな岩に片手でしがみ付き、必死に引っ張られまいとしたものの、他の3人によってその手はいとも簡単に外れてしまった。

「やめて……っ。

離して……下さい……っ！」

私は必死に抵抗した。

「ったく……、うっせーんだよ！」

ニット帽の男は私の顔を拳で殴った。

「ちょっ！

須崎（すぎき）センパイっ！

殴るのはナシでしょ！」

どうやら、ニット帽の男は須崎というらしい。

私は痛みにこらえられず、一滴の涙を流してしまった。

「あっ・・・！」

私は殴られた衝撃で地面にうつぶせているような状態になる。

私が流した涙は頬を伝って地面へ落ちる。

「・・・っ！」

逃げて・・・っ！」

私は必死に叫ぶものの、4人ともに通じていない。

「可哀そうな・・・人たち。

もう、助けられない・・・。」

なぜか、その言葉だけ聞いた須崎は怒りの矛先を取り巻きから私へ変更された。

「おい、てめえ。

可哀そうって何のことだ？」

もう、あなたたちは私の力に憑りつかれてしまった。

この、涙の力に。

涙が地面に落ちて1分半、4人組に異変が起きた。

4人とも、首や胸を押さえながら地面へ倒れていく。

須崎という男が何やら唇を動かしている。

私には、理解できなかった。

何を・・・言っているの？

4人組は地面に突っ伏したまま、微動だにしない。

・・・もう、死んでしまったの・・・？

私はこのことで、二度とこの力で誰も死なせないと誓った。